

狙う的は東京でのメダル

小野寺公正
リオデジャネイロパラリンピック
アーチェリー男子リカーブ個人出場



Onodera Kimimasa

1983年7月22日、東和町米川10区生まれ。生まれながらに足が内を向く障害があり、2歳時に右脚の膝から下を失う。東和中2年でアーチェリーに出会い、中3時に全中で5位入賞。米谷工(現登米総合産業高)進学後はインターハイや国体で入賞。アテネパラリンピックでは団体に銀メダルを獲得。倉元製作所(栗原市)勤務。父、母、弟、祖父、祖母の6人家族。身長は161㎝。趣味は漫画

8 月25日昼過ぎ、日本身体障害者アーチェリー連盟から小野寺に連絡が入った。リオデジャネイロパラリンピック(以下、リオ大会)のロシア出場枠が、日本に再配分。次点の小野寺に声がかかった。「チャンスは二度ない」と即決した。
出場を決めたものの、不安はあった。6月のリオ大会最終予選会後、「コーチと話し合い『東京大会に向けて全てを変えよう』と、弓を変え、フォーム改造に取り組み始めたところでした」。フォームが固まっていないう状況で出場を決めたのだ。
成績に直結する弓とフォームをどうするか。下した決断は「新フォームで前の弓を使う」だった。「弓もフォームも東京仕様にしたかったのですが、アーチェリーは道具との相性が結果に直結します。上位を狙いつつ、新たな取り組みを無駄にしないことにしました」。

8月29日、会社や周囲の協力もあり予定通り、リオデジャネイロに向けて出発した。

選 手に入り後は、新フォーム習得に全てを費やした。射撃フォームを携帯電話などで撮影し、日本にいるコーチへ送信。こまめに連絡を取り、フォームチェックを繰り返した。小野寺は「短期間ですが、勝負できるところまで仕上げられました」と新フォームに手応えを感じていた。

9月10日、予選が始まった。予選は全員が72射し(720点満点)、順位

は合計得点の高い者が上位となる。決勝は、予選1位と最下位、2位と最下位から2番目と、順にたすき掛けで組み合わせられる。予選で上位に入れば、1回戦の組み合わせが有利になる仕組みだ。
今大会の目標は「新フォームをやり通す」。重圧がかかる大舞台で、慣れたものを捨てることは勇気がいる。小野寺はリオで生まれ変わるうとしていた。「ほぼ現在のベストを尽くせ」と予選を振り返る小野寺。結果は591点で18位。決勝1回戦は、予選15位の選手に決まった。

決 勝は6セットポイント先取で勝利。1エンドで交互に3射し、合計得点の高いほうが2セットポイント、同点の場合は共に1セットポイント獲得する。

第1エンド、ほぼ理想のフォームで撃てた。だが、相手も世界の強豪、2セットポイントをリードされた。「焦りはありませんでした。自分のすべきことに集中していました」。

第2エンド、相手が満点を出し、4セットポイントをリードされる。次を落とすと負けが決まる。迎えた第3エンド、1射目でリードされるが、2射目で同点に追い付く。3射目、大ききく的外し万事休す。セットポイント0-6のストレート負けを喫した。

「負けは悔しいですが、後戻りせず新フォームを続けることができました。東京につながる大きな収穫で

小 野寺は「今があるのはスポーツと支えてくれた人たちのお陰」と言い切る。
物心が付いたときには義足。成長するにつれ、他人とは違うことに気付いた。しかし、大好きなスポーツで負けたくなかった。小学時代は地元野球チームで一塁手として活躍。中学進学後は、バスケットボール部からアーチェリー部へ転部した。初めて出場した大会は45人中45位。「負けたくない」と自主トレを始めた。1年後には全中で4位入賞を果たした。

中学校からの同級生で、共にアーチェリーをしている芳賀裕考さんは「公正は運動センスもあり、身体能力も高いです。一流選手に必要な『的に当てる感覚』も非常に鋭い。でも、それだけでここまで来たわけでありません。努力があったからこそ今」と語る。

決 して順風満帆ではない。社会人になり、練習時間が確保できず伸び悩んだ。一度はパラアーチェリーから退こうと考え、1年以上パラ競技から離れた。だが、14年「このままでは終われない」と復帰し、ここまで戻ってきた。

これからの目標は「東京大会でメダルを取る」。自国でメダルを取れば、アーチェリーにも障がい者スポーツにも注目が集まります。それが自分のできるスポーツとみんなへの恩返し」と笑顔を見せた。